# 大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.75
2008.8
夏

**特集　第12回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー**

出版人と三国外交
——ポスト京都の日韓中三カ国セミナー　斎藤至……2

著作権法における教育利用と補償金制度　植村八潮……6

四つの課題、四つの挑戦
——学術情報流通の変化と大学出版部の発展戦略　鈴木哲也……10

【インタビュー】
イサカ・レポートと日本の学術出版
——一橋大学・佐藤郁哉教授に聞く……14

●連載
初版本、ナンセンスなフェティシズム
ほぼ日刊イトイ新聞／糸井重里発行『金の言いまつがい』　酒井道夫……表2

大学出版部ニュース……22

有限責任中間法人大学出版部協会
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

# 初版本、ナンセンスなフェティシズム

ほぼ日刊イトイ新聞／糸井重里発行
『金の言いまつがい』
酒井道夫（武蔵野美術大学）

**私はこの本の初版を所有し損ねている。** 残念ながら「**第二刷**」なのである。「二〇〇六年十二月三十一日 第一刷発行、二〇〇六年十二月三十一日**午後** 第二刷発行」。ちなみに『**銀の言いまつがい**』の方は、「二〇〇七年**一月一日 第一刷**発行」。

この二冊のアートディレクションを担当しているのが**祖父江慎氏**だから、彼一流のジョークなのかもしれないけど、その真相は？ **本作りの現場に不案内なくせに、**やたら変型にしたり用紙や印刷に凝る**不遜なデザイン**を私は好まないのだが、祖父江慎氏の手にかかれば話は違う。この二冊を並べると『銀の言いまつがい』の背が前につんのめっている。**ここまでやるか！？**

**大晦日**の三十一日を発行日とするような慣行があるのかどうか、また**その日の午後に第二刷**発行なんて、そんなのってあり？

愛のないデザインは陰惨だが、**愛があれば何でもあり。**

**「大好きっ！ もっとやって！ もっとやって！」**

彼の**「まつがい」仕事**では、これに先行して『**伝染るんです。**①－⑤』（吉田戦車著、小学館、一九九〇－九四）の装丁がある。

このシリーズの存在に気づいたのは、刊行開始後、すでに相当時が経ってからだった。慌てて買い集めてはみたものの、どうしても**第④巻**だけが入手できずほとんど諦めていたら、吉祥寺駅付近ガード横の小さい書店で、一冊だけ店晒し状態で**遭遇！**

カラー印刷の腰巻き付きで、そこに**俳優・高嶋政宏氏がニッコリ**と笑みを浮かべて待っていた。**だから言うのだけど、**

この本は全巻揃いでなくては**意味がない。**それも一冊でも帯を失っていたら**価値がない。**ただ、全巻にわたって**落丁乱丁裁断ミス印刷ミスの満艦飾。**素人にも判る「まつがい」だけでなく、相当な専門家でも見落とすほどの**かなり深い楽屋オチ**まで数えたら、一体どれだけの「まつがい」が盛り込まれているのか分からない。

**『金の言いまつがい』に「第一刷」は存在するのか？**
**はたまた、今後「まつがい」本の第三弾はあるのか？**

（みちお）

特集

# 第12回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー

# 出版人と三国外交——ポスト京都の日韓中三カ国セミナー

斎藤　至（国際部会副部会長、京都大学学術出版会）

二〇〇八年五月、韓国・光州市で開催された第十二回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー（以下三カ国セミナー）は、国際出版連合（ＩＰＡ）ソウル大会に引き続き開催という状況で行われた。またホスト国・韓国大学出版部協会の強い意向で五月十五～十七日、開催時期を前倒しにした日程となった。ＩＰＡソウル大会と時期を併せた開催については、ＩＰＡ未加盟国である中国大学出版社協会代表団の参加について多少の懸念があったものの、結果として日本側を上回る参加を得た。なお会期直前に中国・四川省を襲った大地震によって、当初二十二名の参加者が予定されていたが、七名が欠席を余儀なくされた。記して安寧を祈りたい。

筆者は入社して以来の数年で、第十回（日本・京都）、第十一回（中国・杭州）、第十二回（韓国・光州）の全てに参加する機会に恵まれた。貴船の清流のもと、署名旗を掲げた京都の夏は、今も記憶に新しい。本稿では新たな転換期を迎える本セミナーの三カ年をささやかながら俯瞰しつつ、外交の観点からその意味を見つめ直したい。

## 起点としての「京都調印書」

一九八三年以来開催されてきた日・韓二カ国セミナー十五年間の歴史を経て、三カ国セミナーは、一九九七年第一回の長野・諏訪湖開催を皮切りに、以後開催地を日本・中国・韓国の順で持ち回りにし、今年まで十二年間開催してきた。この間、ＳＡＲＳ（サーズ）問題をひとつの契機として中国側協会との連絡に支障が生じ、関係正常化のために調整を要したが、[1]二〇〇六年の京都セミナーにおいて「日・韓・中大学出版部協会協力調印書」が取り交わされ、「実質的かつ具体的な交流」への新たな一歩が踏み出されることになった。

これ以降、セミナーの主題は相互の出版事情の紹介を超え出て、具体化の様相を帯びはじめた。共通主題を列記するに留めるが、昨年の杭州セミナーでは、「設置形態」「財務管理」という経営管理上のイシューが取り上げられ、制度上の差違やその比較に注目が集まった。また今年の光州セミナーでは「出版戦略」「著作権管理」が取り上げられた。折しも日本では三月十二日に大学図書館と大学出版部協会とのシンポジウムが開かれ、学術情報リポジトリへの取り組みが紹介された。続く四月下旬の出版学会でも、長尾真国立国会図書館長を招いて「デジタル時代の図書館と出版」と題するパネル・ディスカッションが催された。今回のセミナーにおける日本側の報告者である鈴木哲也（京都大学学術出版会）、植村八潮（東京電機大学出版局）の両氏は、それぞれの場で議論を牽引した当事者でもあり、この間の日本国内の議論を反映した密度の高い論攷を提示された。このほか韓国側から著作権に関する詳細な比較類型が報告されたことは、今後の版権交渉が生じた際の資料として参照に値する。

このようにみると、「京都調印書」の周辺を巡る三カ年は、日韓が中国の出版人をどのように巻き込んで交流を継続・発展させてゆくか、という、ある種の「二極論」的構図として読むことができる。[2] しかし、こうした解釈は日韓の側からみた一面性をはらんでいることに注意したい。むしろ、ある意味でセミナーにやや距離を取ったようにもみられるこの間の中国の姿勢が、意図せずしてセミナーの意義と内容に再考を迫り、実質的な深化を生むに到ったともいえるのではないだろうか。[3] 以下では、やや立ち入った検討を加えてみたい。

## 国際交流をめぐる障壁と課題

当初、日・韓二カ国の大学出版部協会の国際交流を目的として始まった合同セミナーに中国大学出版社協会が新たに加わり、現在の形に到っていることは既述のとおりである。回を重ねるごとに、主に日韓の間でより実利的な成果が得られるセミナーとしての位置付けが求められるようになってきた。そのような背景から韓国側の起草した協力書案をもとに検討を重ね、二年間の協議を経て、最終的に中国を加え、日韓中三カ国間での調印に到ったのである。中国との関係正常化を語るうえでは、少なくともこの点を踏まえたい。

ひるがえって、国際交流としての三カ国セミナーへの関心度を測る時、セミナーの実益・実効性をどう位置付けるか、という点は無視できない重要な要素であるといえる。近隣諸外国の例に学び、その知的資産を自国に紹介できること、および、自国で高評を得た研究を諸外国へ発信できることはそれ自体、大きな実益といえよう。三カ国セミナーでは近年、各国の大学出版部の発行図書を展示し、版権交渉の契機としてきた。それにもかかわらず、契約が成立

した実績は過去にひとつもなかった。また、展示図書は新しい企画を構想する際の参考になるはずだが、意見交換は充分になされてこなかった。

セミナーに「参加することに意義がある」と訴えるだけでは、単なる同義反復の域を出ない。更に言えば、年一回、各国の代表者が集まり、主題に沿った報告を発表し合い、質疑を経て問題点を検証し合うだけでも充分とは言えまい。次に繋がる契機をつかみ取ってゆかなければ、率直に言って「有意義であった、また来年」の繰り返しに陥りかねないのではないだろうか。

ひとつは、セミナーの進行形式に課題がある。現状では、報告資料は事前に三カ国に翻訳され配布されており、当日は三カ国の報告者が各二十分程度に要約して講演し、質疑応答は十数分、逐次通訳を採用している。一部の参加者からは、口頭報告の時間を短縮し、同時通訳を採用して、質疑応答をより充実させてはどうかという意見も聞かれた。

実際、言語の壁はけっして低くない。かつて日韓中三国は「漢字文化圏」という共通性のもとに連帯感を養ってきたと言われる。しかし近年の英語一極化、そしてこれと並行する自国語尊重という多極化は、連帯感の保持を難しくしている。残念と言うべきか、英語は必ずしも共通言語となっていない。韓国語とて、昨今の韓流ブームでにわかに注目を集めているものの、（ハングル尊重政策による）漢字を廃した看板や標識の列に、目の眩まない者はいないはずだ。筆者は逆立ちをしながら歩くようなもどかしさを憶えずにはいられなかった。

## 外交交渉としての三カ国セミナー

ここで冒頭に触れた「外交」という観点に立ち返りたい。外交とは国家同士の威信を賭けた、いささか大上段に構えた表現ではある。しかし実際のところ、三カ国セミナーは出版人一人ひとりが対面し合う生々しい外交の場にほかならない。[3] このような認識に立ち、以下にいくつかの提案をおこないたい。

今回、筆者の所属する京都大学学術出版会では、セミナーの際展示した図書が韓国の大学出版部から翻訳の申し出を受け、目下、鋭意交渉を進めている。また中国の大学出版社からは、自社の新企画のために、小会が刊行するシリーズの一部を参照したいという申し出もあった。実は、今回小会の展示図書には、中国語・韓国語の梗概ならびに推薦文を添えて臨んだのである。むろん、準備が充分なものであったかは、はなはだ心もとないし、成約の可能性も不透明である。しかし言語の壁は中韓側にとっても同じだからこそ、こうした僅かな工夫が関心を惹き、交渉のチャンスを拡げたことは確かであろう。

また、個別の取り組みと併せて、十分な数の優れた同時通訳者を配置することも喫緊の急務である。とりわけ版権取引等でより実質的な交渉が進めば、多言語状況下の議論

を円滑にし、支援する環境が求められる。優秀な通訳者を賄うだけの費用をどう捻出するか、課題は多い。しかし卓越した通訳者はしばしば「外交団の一員」「小さな外交官」ともみなされる。[5] 本セミナーの趣旨を的確に理解した通訳の助けを得ることができれば、代表団は議論そのものに力を集中することができるのではないだろうか。

こうして考えると、実のところ本質的な問題は、多くの出版部が労を厭わず参加しないこと、三カ国セミナーの価値を理解しないことにあるのではないだろうか。更にできうるならばセミナーの場を単なる国際交流の場に留めるのみならず、自社の実益に結びつける位の意欲をもって参加するような認識を持っていないことにあるのではないだろうか。

## 「ポスト京都」の大学出版交流

「ポスト京都」の布石たる今回のセミナーは、日本側協会に多くの課題を突きつけた。実のところ、こうした国際交流は、一般の商業出版社においても進んでいる。折幸いにも、本セミナー直前の三月末に「東アジア出版人会議」が京都で催され、日本大学出版部協会からも関係者が同席する機会に恵まれた。そこでは、岩波書店やみすず書房の関係者を中心に《東アジア百冊の本》の選書が進められているときく。

出版に限らず、東アジア共通の知的資産を構築する動きは少なくない。しかし同時に重要なのは、過去に目を向けるのみならず、目まぐるしく変容する同時代にあって先見性ある学術研究を積極的に紹介し合うことだろう。十二（日韓セミナーを含めると二十七）年という交流の蓄積を考えると、大学出版部こそがそれを担うにふさわしい。

来年、第十三回を迎える三カ国セミナーは、日本がホスト国として準備に当たらなければならない。すでに東京国際ブックフェアに合わせた開催時期やセミナー主題など、韓中の協会からは多くの宿題を与えられている。今までより一層成果の多い日本開催となるよう計画を立て、実行できるよういち早く対応せねばならない。例年に増し、真価の問われる一年になることを覚悟したい。

（1）二〇〇四年、北京において調整会議がもたれた。この間の詳細な経緯は、後藤健介［二〇〇六］「慶州、京都、そして杭州へ――新しいステップへと移行する「日・韓・中大学出版部セミナー」」『大学出版』六十七号を参照。
（2）三浦義博は、近未来の十年を展望して、三カ国の二極構造化と実質的交流の深化を指摘している。三浦義博［二〇〇六］「三カ国セミナー一〇年間の回顧と展望」『大学出版』六十九号を参照。
（3）後藤前掲論文、十三頁。
（4）通訳者個々人へのインタビューを通じて、国家外交の一端を明らかにし、公式文書に依らない「口承史学（オーラル・ヒストリー）」を構成した労作に、鳥飼玖美子［二〇〇七］『通訳者と戦後日米外交』（みすず書房）を挙げたい。語られた歴史の妥当性を検討する余地は残るが、通訳者の眼から見た外交の内幕が垣間見られ、我々が国際交流を育む際のインスピレーションを得るところは少なくない。
（5）鳥飼前掲書、二六〇頁。

# 著作権法における教育利用と補償金制度

植村八潮（東京電機大学出版局）

印刷物は、物々交換の時代から交易品として国境を越えて流通してきた。その後、著作権という権利意識が芽生え、今でいう知的財産としての流通市場が誕生することになる。各国の著作権法は国内産業の保護を目的に制定されたものだが、国際取引のためには各国間で著作権法の調整が必要となる。ベルヌ条約の誕生である。

従って、各国の著作権法は法体系の違いや文化政策を背景に整備される一方で、常に国際的制度協調（ハーモナイゼーション）が求められてきた。特に近年では、デジタル複製技術の進歩、インターネットによる流通市場の確立に加え、知的財産ビジネスの興隆、米国政府主導の国際世論形成によりハーモナイゼーションは喫緊の課題である。

もちろん権利強化だけが解決策ではない。米国の政策は自国の知的財産保護強化の押しつけともとれるし、オープンアクセス活動やフリーソフトの興隆は国民利益にかなうものである。それに加えて権利者意識の高まりと利用者のオープン化思想の衝突は事態をいっそう複雑にしている。

さて、いささか前置きが長くなった。これは三カ国セミナーにおいて発表を求められた際、その主題が「各国大学出版部間の国際交流のための著作権実態分析」であったことに対して、とまどいを感じたことの言い訳である。大学出版部が主たる市場とする学術書・教科書分野では、学術情報のオープン化にはじまり、オープン教材活動、eラーニングの普及と教材のデジタル化・ネット流通など急激な変化が訪れている。著作物による国際交流を単純に翻訳取引の問題として語れるものではない。そこで発表にあたっては、著作権実態分析を各国著作権法の比較分析とし、国際交流を著作権の国際協議の中で話題となっているハーモナイゼーションととらえ直すことにした。

さらに問題点を明らかにするために、各国著作権法のう

ち、教育関連の制限規定と補償金制度を取り上げることにした。これは教科書やeラーニング教材が今後、大学出版活動に直接的な影響を与えると考えたからである。

## 日本の著作権法における教育利用と課題

著作権の制限規定の一つに、学校その他の非営利の教育機関における複製がある。三五条の制限規定は、教員や学生が、その授業で使用するために公表された著作物を複製できる、とするものである。その際「必要と認められる限度内」で「著作権者の利益を不当に害さない」とされている。これについては権利者側により「著作権法第35条ガイドライン[1]」が公表されている。この中で、「不当に害する」こととして、「読者対象に、高等教育における学生を含む専門書籍・雑誌を、当該教科の高等教育で使用すること」や、「大学等の大教室での利用」により「大部数の複製等、多数の学習者による使用」することとある。

二〇〇二年のソウル三カ国セミナーでは、韓国発表者から、学生によるコピーよりも複写業者の不法行為が横行しているという報告があった。当時公布された「出版及び印刷振興法案」では、大学街での学術書の不法コピーに対する対策が施されていた。海賊版業者は欧米にもある。

一方、日本の大学教育の現場で海賊版業者による教科書が問題化することは、それほど多くない。理由としては不正という意識がないまま、多くの教員の手により教科書などから複製が行われているためと考えられる。これは教育者の著作権意識が低いことに加えて、著作権法によって教師による著作物の複製配布が〈無制限〉に許されている、という誤解が流布しているためである。これらの行為が「複製の部数及び態様に照らし著作権者の利益を不当に害する」行為であることは明らかである。

日本の著作権法では、著作者の権利を制限する場合に、一部補償金制度を導入している。しかし、三五条（教育機関における複製）に関して補償金制度の導入はない。〇三年の著作権法改正を検討した著作権分科会では、「教育機関における複製と公衆送信」について「原則として補償金の支払いを要する」として継続審議としたが、翌年以降に検討されることはなかった。

しかし、実態として不当に害しているならば、現実的な解決策として補償金制度を導入することが求められる。筆者は、日本のように教育機関における複製を広範囲に許しながら、補償金制度のない国をほかに知らない。

## 韓国・中国における教育利用と補償金制度

韓国著作権法では「学校教育目的等への利用」について、第二五条で規定されている。日本法を参考に起草されただけに、その内容は日本法とほぼ同様である。ただし、教育機関での利用の場合には、補償金の支払いが義務づけられている。対象としては高等学校以下の学校は免除されるも

のの四年制大学校、専門大学、大学院などである。

日本の出版界が今後、教育利用に対して補償金制度の導入を図ることがあれば、韓国における補償金制度の実態は、関係団体との協議の上で大変参考になると考えられる。

一方、中国は一九九一年に著作権法を施行し、翌年、ベルヌ条約に加入している。著作権法とそれを補う著作権実施条例などから著作権利用が規定されている。

特記すべき点として、法二九条から三五条で出版者の権利を詳細に定めており、さらに条例によって著作隣接権という概念は用いていないものの、著作権とは別に「著作権に関連する権利」を出版者に設けていることである。

なかでも特色的なのは、法三五条は出版者の版面権を認めたものと解され、自らの出版にかかわる図書・新聞・雑誌の版面・装丁のデザインに対して排他的権利が認められることである（条例三八条）。その保護期間の規定は存在していない。日本および韓国に比較して出版者の権利が強く保護されているといえよう。

## 欧米諸国における教育利用と補償金制度

ドイツ著作権法では教育利用における制限規定の中で、複製および頒布については、「著作者に対して相当なる報酬が支払われなければならない」として、著作物の複製利用について補償金の支払いを義務づけている。

英国著作権法では、教育利用のための制限事項が規定されており、公正利用（フェアディーリング）条項が適用される。ただしコピーによる複製は認められない。「著作者・出版者連合協会」のガイドラインによると、学校での学習に公正利用は適用されないとしている。したがって、「教師が何らかの複写の方法により著作物の一部ないし全体の複製物を作成し、それを生徒に配ることは、試験を目的とする場合を除き、ほとんど確実に著作権の侵害[2]」となる。

米国著作権法では、権利制限について一〇七条の公正利用（フェアユース）条項が適用される。特に教育機関における著作物の複製配布については、これ以外の規定はない。そこで関係者の協議により、一九七六年の米国著作権法改正を受けて「書籍・定期刊行物に関する授業目的の複製に関するガイドライン」が作成されている。

日本ではフェアユースといえば教育利用を無制限に認めているかのように誤解されているが、むしろ限定的で厳密な運用が行われている。たとえば米国ガイドラインでは数量を具体的に明示するなど詳細に規定されている。そして教師の指導監督下で授業に不可欠な著作物の利用であることが強く求められているのである。

## 教育利用と複写権使用料

欧米では著作権集中処理機構における収入源として、教育機関が高い比率を占めている。結果的に便利で有効な著作権集中処理システムが構築され、教育現場では積極的に

他人の著作物利用が行われている。

各国の複写権使用料を比較すると、その点がよくわかる。日本の複写権管理団体の徴収額は一億五千万円にすぎない。これに対しフランスは四一億円、米国は一二〇億円であり、人口わずか四六四万人のノルウェーでは三八億円も徴収している。人口比にして日本の実に六百倍である。

英国では、新聞の三七億円を別にして、出版物だけで一〇五億円である。そのうち二〇億五千万円を初等・中等教育機関から、二六億円を高等教育機関から徴収している。これらは、いずれも学校予算で支払われている。

日本は読者を保護するためでなく、経済団体の強い意向の結果、複写権使用料が極めて低く抑えられてきた経緯がある。一方、欧米では、よりよい教科書・教材製作のための執筆費や編集費が、豊富な複写権使用料によって支えられている。そこには人の創造的行為を高く評価し対価を支払うことで、新たな著作活動が行われるという、とても「よい循環」がある。日本の著作権法三五条は、本当に有効に機能しているといえるのだろうか。

## 自立的情報流通システムによるデジタル著作物の創造

欧米ではデジタル・ネットワーク社会に対応するために著作権法の改正をはかり、eラーニングを普及させるなど円滑な著作物利用を図っている。その際、従来から安定的に運用されてきた補償金制度を公衆送信権にも拡張し、複写権使用料の予算化を図り、著作権者に対価を支払うことで、創作のためのインセンティブを維持している。

一方、日本では教育利用に対する補償金制度が確立されていないこともあって、eラーニングでの自由な著作物利用に対して権利者側の抵抗が強い。

しかし、デジタル・ネットワークを利用した著作物は国境を越えて流通しており、ハーモナイゼーションの点からも、早急な法整備が望まれている。そのためにも充実した補償金制度や複写権使用料規定を検討するべきである。

日本の学術専門書出版者は、刊行助成金というわずかな例外を除けば、自らの収益で学術出版の発信、流通を担っている。出版者は流通を担う取次、販売を担う書店とともに出版産業を形成し、国からの大きな補助金を得ることなく自らの商行為の中だけで、出版流通システムを維持してきた。このような自立的な情報流通システムによって、良書と呼ばれる数々の書籍を読者に届けてきたのである。

このような自立的情報流通システムをデジタル・ネットワーク環境下で再構築し、良質なデジタル著作物を生み出すシステムを早く整備することこそが、長い出版文化の歴史を誇る日本・韓国・中国に求められているのである。

(1) 正式には「学校その他の教育機関における著作物の複製に関する著作権法第35条ガイドライン」。

(2) フリント、ソーン共著、高橋典博訳『イギリス著作権法』(木鐸社、一九九九)、二八二頁。

# 四つの課題、四つの挑戦——学術情報流通の変化と大学出版部の発展戦略

鈴木哲也（京都大学学術出版会）

学術情報流通の有り様が大幅に様変わりしたにもかかわらず、学術出版はその変化に対応しようとしていない——こうした発言を私自身何度かしてきたが[1]、では何らかの処方箋を示したか、といえば正直、忸怩たるものがある。もちろん、今でも有効な手だてなど見つけてはいないのだが、ともかくも悪戦苦闘をしてきた途中経過を報告するのが、本稿、すなわち光州での私の報告の要旨である。

## 学術コミュニケーションの四つの課題

学術情報流通の変化については、本誌上も含め何人もの論者によって指摘されているが、その論点を詳しく紹介する紙幅の余裕はない[2]。ここでは行論のために、少々乱暴だが、問題を出版との関係で四つに整理してしまおう。

### 学術情報の高度化、細分化と出版

一つは、学術情報の高度化、細分化だ。研究の現場では、細分化の弊害と同時に、学問の再統合の必要がしばしば指摘される。論文に torward a new paradigm という副題が付けられれば、それは最高の宣言に違いないが、そのためには、細分化した研究を広く俯瞰し総合する営みを必要とすることは言うまでない。そこでいわゆる教科書とは違う、一つの領域全てを包括するような概説書が出版において意味を持ってくる。

よく知られているように、こうした種類の学術書は、欧米の市場には多数存在する。私はそのいくつかの翻訳出版に携わったことがあるが、いずれも一〇〇〇ページ前後の大著だ。ところが日本の学術版元は、こうした書籍を作る意欲をほとんど持たない。嵩高で高価な本は市場適合的でないという近視眼的な立場から、編集者の多くは「薄く安く」と著者に要求しているのが実情だろう。

## 研究の競争状況に応える出版とは

こうした状況を一層悪くしているのが、研究における厳しい競争状況だ。publish or perish という言葉は古くからあるが、今や「学術書」という形での成果公開は、研究者個人の問題というよりは「大学・研究機関の生き残り」のためのものとなっている。

そもそも学術論文の量自体がここ四半世紀で著しく増加した。八〇年代以降、世界中で発表される論文数はおよそ二倍になったとも言われるが、このように量産された論文を「金さえ払ってもらえれば」と引き受ける出版社も現れている。その結果、「本」なのか単に論文をファイルしたものなのか判別しがたい「学術書」が溢れ始めている、と言うと言い過ぎだろうか。しかもその一方で、日本の学術版元には、学術成果の国際交流に資するという見識がほとんど無い。このことは、すでに何度も書いてきたので繰り返さないが、いまだに英文出版が低調なことは残念な限りだ。ともかく、「何を出版すべきか」という問題が不問に付されたまま、「学術書」が量産されてはいないだろうか？

これが第二の問題である。

## 大学（大学院教育）の様変わりの中で

ここで視点を、教育の側面に移そう。国立大学法人化とともに、日本の大学を大きく変えたのは大学院重点化だが、その結果、大学院教育は大きく変わった。京都大学では、「最も優秀な学部卒業論文」と「最も劣った修士論文」の差が大きく開いた（もちろん、前者の方が上なのだ）とさえ、言われている。基礎的な知識を身につけていない者が、極めて細分化された研究の世界に入ってくるという矛盾。これまでの大学院教育の在り方は大きな見直しを迫られ、そうした中で、教科書の問題がクローズアップされている。特に、徹底した演習重視の、いわば「頭を使い手足を動かすことで、その領域に必要なセンスを養うための教科書」が必要になっているのだが、日本の学術出版界はそうした要求に応えられていないといって良かろう。

## オープンアクセスの思潮と「出版パッシング」

そしてこうした事態を一層深刻かつ複雑にしているのが、学術情報流通のメディアそのものの多様化だ。「学術出版が、知的成果物を独占している」という研究者側からの強い批判を基盤にした「オープン・アクセス」の思潮に対し、率直に言って出版の側は正面から向き合って来なかった。その結果、いわゆる「学術情報リポジトリ」が研究機関によって整備されるにつれ、既存の出版システムを素通りして研究成果を公開しようという「出版パッシング」の動きさえ見られるようになっている。これが第四の問題だ。既存の学術出版は、存在自体、影の薄いものになりつつあると言っては言い過ぎだろうか？

## 大学出版部の四つの挑戦——京都大学の試み

こうした状況の中で、我々はどこに存在意義を見出し発

展できるのか。ここからは、京都大学学術出版会（以下小会）のささやかな取り組みを紹介することで試論としたい。

**包括的概説書の刊行**

本格的な包括的概説書の刊行が大きなビジネスになりうると小会が確信したのは、M・ベゴンらによる『生態学』（原題：*Ecology : Individuals, Populations and Communities*）の翻訳刊行以来である。本書はB5判一三〇〇頁（全二色刷）という大部なものだが、それを一万二〇〇〇円で販売するという計画には、正直、疑問の声もあった。しかし、結局二回重版し四〇〇〇部を完売、満足すべき利益を上げた。その後小会では、翻訳には頼らない形で、水圏化学、群集生態学、大気観測、農業史等の分野で同様の図書を出版し、いずれも成功させている。

学問を俯瞰し他の領域へと繋ぐことができるのは、大学の中にいる者の強みである。一般の出版社が敬遠する中にあって、こうした本を刊行することは、大学出版部の評価を高め、経済的にも成功する戦略ではないだろうか。

**英文書の刊行とアジア研究の共同普及**

日本の大学出版部の中で、小会が「最先端」と胸を張れるのは、海外の大学出版部等（シンガポール国立大学出版部、豪Trans Pacific Press社、および、インドのCactu Communications社）と共同した英文書の刊行だ。この詳細については、かつて本誌上で紹介[4]したので割愛するが、シンガポール国立大学出版部との間で始めようとしているもう一歩進んだ形での共同、すなわち「Pan Asian Collection」（PAC）については簡単に触れておこう。これは共同出版物以外の書籍、すなわち日本とシンガポールそれぞれ独自に企画したアジア研究の英文書を、お互いのカタログにも掲載し販売するというプログラムだ。さらにこの取り組みをアジア全域の学術版元に拡大したいとも考えている。アジアの研究者による優れたアジア研究が必ずしも国境を越えて共有されていない中、国際共同の実績を活かしてそれらを普及することで、研究を一層活性化させていきたいと考えている。

**新しいタイプの教科書、自習書**

実は小会は、これまで教科書の発刊には消極的だった。周知の通り大学の学部課程教科書を出版することを専門にした出版社は多く、あえてそれらの出版社とは競合しない戦略をとっていたのだが、先に述べたような教育状況の変化を受けて、一昨年来、「これまでにない教科書」を開発することを方針に掲げ、開発に取り組んでいる。研究のみならず、教育面での要請に即座に応えることが出来るのも大学出版部の強みであろう。まずは、数学、物理学、化学、地球科学といった分野で、学生、大学院生が、「自らの専門に引き寄せながら、自分の頭で解いていく」という種類の教科書を出版できるよう、企画を進めている。

**学術情報リポジトリとの共同と今後の展開**

第四の課題、すなわち、学術情報メディアの多様化にど

う対応するか。一言で言えば、学術情報流通を担う出版以外のセクターとの共同なしに、そうした対応は、全く出来ないと言って良い。少なくとも、小会はそうであるし、どれほど大きな版元でも同様だろう。

この点で、小会が京都大学学術情報リポジトリと共同を始めたことについても、すでに本誌上で紹介した。[5] 今後は、単に刊行物をリポジトリに掲載するだけでなく、オンラインの電子メディアである点を活かした、教育利用の在り方を探る必要がある。また、リポジトリのような、ノーコストノーリターンのシステム以外にも、それ自体がビジネスとなるような電子的な成果公開も模索せねばならないと考えている。

## 実践のための議論の場としての国際セミナー

学術出版・大学出版部の在り方ついては、これまでも多くの議論がなされてきた。しかし、それらは必ずしも実践の課題として語られて来なかった、と言うと不遜だろうか。その点で、一三年に亘って取り組まれてきた三カ国大学出版部セミナーは、日々、迷い悩む実践者による討論の場として、非常に貴重なものだったと思う。紙幅の関係で、ごく簡単にしか紹介できなかったが、本誌植村論文や斎藤論文と併せて、できれば当日の全報告文書に目を通すことは、今後の大学出版部、学術出版の在り方を探る上で、貴重な示唆になると思う。大学出版部のメンバーはもちろん、本誌読者の諸氏が、この取り組みに一層の関心をいだいていただければ幸甚である。

(1) 鈴木哲也「肝心のことは問われているか——出版部設置ブームの中で」『大学創造』第一二号、二—七頁、二〇〇二年。鈴木哲也「大学出版部は存在意義を示せるか——京都大学学術出版会の取り組みから」『情報の科学と技術』Vol. 53、No. 9、四二三—四二八頁、二〇〇三年等。

(2) 直近では、山本俊明「アメリカ型大学出版部モデルのゆくえ——「デジタル時代における大学の学術情報発信」(イサカ報告)をめぐって」『大学出版』No. 74、二—一一頁、が大変参考になる。

(3) 鈴木哲也「「集約点」としての英文出版」『大学出版』No. 56、一〇—一三頁、二〇〇三年。

(4) 同前。

(5) 鈴木哲也「知のコミュニケーションの核としての共同——学術情報リポジトリと大学出版部(京都大学の試み)」『大学出版』No. 74、二一—二七頁。

【インタビュー】

# イサカ・レポートと日本の学術出版

## ――一橋大学・佐藤郁哉教授に聞く

**【解説】** 佐藤郁哉氏は、一九五五年生まれ、シカゴ大学にて社会学博士号（Ph. D）取得後、現在、一橋大学大学院商学研究科教授。主な専攻は、文化社会学である。主要著作として、『暴走族のエスノグラフィー』（新曜社、一九八四年）、『現代演劇のフィールド・ワーク』（東京大学出版会、一九九九年、日経・経済図書文化賞受賞）、などがある。近年は「出版」をフィールドとして研究に取り組み、その成果は「ゲートキーパーとしての出版社と編集者」（『一橋ビジネスレビュー　2005　WINTER』）などとして公表されている。さらに、二〇〇一年から行ってきたフィールド・ワークの成果は、上智大学・芳賀学教授、早稲田大学・山田真茂留教授との共著として新曜社から刊行が予定されている。

『大学出版』前号（七四号）でも紹介された、大学と大学出版をめぐるアメリカの現状と展望を示した「イサカ・レポート」を受け、これをどのように理解すべきかを始まりとしてインタビューは行われた。今後の学術出版を考えていくうえで、示唆に富んだ論点が散りばめられていると思う。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・構成　東京大学出版会・山田秀樹）

### イサカ・レポートを読む

――イサカ・レポートをどのように読まれましたか？あるいは『大学出版』七四号掲載の山本論文（「アメリカ型大学出版モデルのゆくえ」）をどのように読まれましたか？

最初に前提とお断りになりますが、僕は山本さんやイサカ・レポートを書いた人たちとは少し違って、どちらかと言えば、読者あるいは図書館のユーザー、また特に社会科学の研究者であり、大学教員、そして時には著者でもあるという立場からお話ししたいと思います。

一つ大きく感じたのは、山本さんも指摘されていることですが、レポートには、かなり技術決定論的なところがみられるということです。僕としては、デジタル出版が情報発信のテクノロジーとして大きくクローズアップされる以前から、もっと制度的なところで、アメリカ型の大学出版部の存在意義というものが問われていたという印象を持っています。イサカ・レポート自体、その二年前にジョン・トンプソンが著した*Books in the Degital Age*という本をふまえていますが、トンプソンのほうでは制度的な変化というものをわりと丁寧に追っているところがあるので、両方を合わせて読むと面白いと思います。

もう一つ、大学出版部の変化について知る上では、一九七九年に出された*Scholarly Communication: The Report of the National Enquiry*という報告書を、もう一度読み返してみる必要があるかも知れません。この報告書をみると、当時は、大学出版部の存在意義それ自体は所与の前提とした上で、その経営危機が問題になっていたようです。つまり、「存在意義のあるこの組織をどのようにして維持していけば良いのか」ということが議論の中心だったと思うのですが、それが、二〇〇七年のイサカ・レポートになると、「そもそも存在意義があるのか」という根底的な問いかけがなされているように思えて、僕にとってはある意味ショックでした。

その点に関してイサカ・レポートで気になったのは、「ミッション」という言葉が何度も出てくるということです。数えてみたら三二回も出ています。ただ、レポートの中で、その「ミッション」の定義が必ずしも明らかにされているわけではありません。どうやら、大学出版部が担うべきミッション、あるいはまた大学自体が負うべきミッション、というのが揺らいでいるし、また模索されてもいる。ある時期、それこそ七〇年代のはじめくらいまで安定していたのが、文教予算の削減や制度的根拠に関する疑問が提出されたりして揺らいでいったのではないか。今それを、根本から考え直すべき段階に来ているようですね。また、一体誰がそのミッションを規定すべきなのかという点も揺らいでいるという印象がありますね。

――イサカ・レポートによると、大学出版部は大学と組むことによって資金を大学から引き出してくる、そこに生き残る活路があるんじゃないか、ということですよね。逆に言いますと、そうせざるを得ないほど資金的にも追い込まれている。その危機的状況はデジタル化にどの程度起因するものなのか、そのあたりはまだ判然とはしな

いところがあると思いますが、デジタル化社会の中で学術出版をどのように行い、あるいは知的なソフトをどのような形で発信していくか、ということは今後追求すべき課題だと思います。そのあたりはいかがでしょうか？

大学出版部には編集のノウハウ、出す本にお墨付きを与えられるだけの「のれん」の重み、原稿のスクリーニングに関するノウハウがあったし、独自のビジネス・センス、それから「人脈資産」みたいなものがある。でも、お金がない。図書館には膨大な資金があるし、ITの蓄積もある。だから、両方組めばいいんじゃないか。とまあ、言われてみればそうだけど、そんなに簡単にいくのかな、というような印象があります。しかも、そのデジタル化して生き残る知の内容自体がどういうものなのか、という点も問われるべきかと思います。トンプソンは、大学における知の中身について、人文・社会科学系、あるいはリベラル・アーツ的な知というものの比重が、大学社会の中でかなり小さくなっているというような話をしています。そのあたりのことも考えなきゃいけないと思っています。

そこで、人文・社会科学系の出版を得意にしてきた米国の大学出版部とは何か、ということが問われてくるのでしょうね。さきほど言った大学出版部のミッションをめぐる問いでもあるのですが、レポートでは、学術書とは何か？大学出版部が刊行すべき学術書とは何か？　さらに大学における知、すなわち大学自体のミッションとは何か？　これらの問いが混在しているように思えます。レポートは、学術書の位置づけ、なかでも紙の本の形をとった学術書の位置づけが変化してきていることを訴え、それがひいては大学出版部とは何か、というところの問いに結びついていくというように読めるのですが、僕としては、デジタル化云々にとどまらない、もっと深い構造的な変化があったように思うのです。

――「もっと深い構造的な変化」とは何でしょうか？

大学出版部の位置づけに関わる変化なのですが、僕がショックを受けたのは、イサカ・レポートには、「大学当局者にとって大学出版部の優先順位は、それほど高いものではなくなっている」と繰り返し書いてあることです。それが先ほどの *Scholarly Communication* という七九年の本だと、大学出版部それ自体については学内的に高い評価が与えられているとしている。もし、この二つの現状認識がそれぞれの時点で正確なものだったとしたら、この三〇年の間に評価がガラッと変わったところがあるのかも知れません。大学出版部自体もすごく変化していて、一般書的な本が三割以上の割合を占めているとか、あるいは教科書的なものを出すとか、小説を出していくとか、背に腹は変えられないというわけで、資金難だからミッションと

言われたところからは外れたところにも手を出すようになって、何とか組織維持はできるけれども、ミッションが見えにくくなってきたところも多いのではないでしょうか。

大学出版部の刊行ラインナップが多様化せざるを得なかったことについては、大学自体の、社会の中での役割が変化していったことも大きいと思います。たとえば、研究機関として、高等教育機関としての大学が、リベラル・アーツ的なものから、より実践的な知のほうにシフトしているという点が大きいのかも知れません。

その構造的な変化に見舞われて大学出版部が追い詰められていった。いままでは、「紙の本」として、細切れの情報ではなく、一つにまとまったものを最初から最後まで読むのが大前提である、人文・社会科学系のモノグラフを出すということが、アメリカの大学出版部の存在意義の一つだったわけです。しかも、それは研究図書館などにある程度高く売れるものでもあった。ハード・カバーだと三倍とか四倍しますよね。トンプソンは、出版部はある時期からハード・カバーとソフト・カバー両方出すことをやり始め、その結果図書館がソフト・カバーを買うようになってしまったと言っていますが、これは戦略の読み違えと言えるかもしれません。社会における大学自体の位置づけの変化、それから大学内での配分の比重の置き方の変化、さらにそれぞれのプレーヤーが取った戦略の読み違えもあり、大学出版部の経営が苦しくなってきた。

もちろんすべての大学出版部に当てはまるわけではありませんが、中堅以下のところがそういう流れのなかに飲み込まれてしまう可能性はあるような気がします。

そのあたりも、僕が言う「構造的な変化」です。デジタル化の影響は、それに更に付加する形で効いてきたのかな、と。でも、ジャーナルはわりと細分化された情報として変化に動かされやすいでしょうが、それに対して、一冊ごとに「作品世界」みたいな性格があるモノグラフというのはなかなか動かせない。僕などはまさに「紙」で育った人間ですから、電子化は確かに便利ですが本当に良いことなのかな、と思います。紙というのはある意味では本当に便利ですし、やっぱり「紙の本」で最初から最後まで読むという作業は、どうしても必要だと思っています。

――イサカ・レポートが日本の学術出版に示唆するものはあるのでしょうか？　それとも、別の国の事例として分けて考えた方が良いのでしょうか？

それほど急激にアメリカのようにはならないと思います。幾つかに分けて考える必要があると思うのです。学術出版という世界の中でどういう変化が起きるかという話と、その中でも特に大学出版というサブ・セクターの中で何が起こるのか、という話と。アメリカの大学出版部が危機感を持っているのは、電子ジャーナルが図書館予算を大幅に食っているだけでなく、非営利という前提でやってきたところにイサカ・レポートで指摘されたような現象が出てくる。例えば大学図書館が持っている巨大な予算でリポジトリを発信するなど、無料サーヴィスが行われるということです。しかし、日本の場合、出版業界の中で大学出版セクターとほかのセクターとはそれほど明確には分かれていないですよね。たとえば、日本ではいわゆる私企業の学術系出版社も、ある部分では、アメリカでは大学出版部こそが出すような、あまり儲からないけれども学術的価値の高い学術書の出版を手がけてきましたよね。

一方で、アメリカで大学出版部が担ってきた、ピア・レビューを前提――ある程度は建前かも知れませんが――とした評価機能というか、ゲート・キーピング機能というものを日本の大学出版部というのは必ずしも果たしてきたわけではない、という事実もあると思います。むしろ日本は、編集部ないし編集者主導の企画先行型が主流だったと思います。そういうところは全然違うと思います。また、日本の人文・社会科学系というのは、本という形がまだ強い部分があるので、業績審査のところでは本のほうがジャーナルよりも重きを置く分野がある限りは、生き残っていけるようにも思います。

むしろ気にかかるのは、モノグラフの「危機」がアメリカでもイギリスでも日本でもあると思うのですが、全然意味が違っているのではないか、ということです。アメリカの場合には、モノグラフが出せなくなってきてテニュアが取りにくくなっている。それは研究者のキャリアにとっての危機であり、大学出版部の存亡の危機にもなっているのですが、日本の場合はそれとは状況がかなり違うと思います。むしろ出版不況だからこそ、専門書出版の世界全体では本が出しやすくなってるということがあるのでは。つまり、尊大な言い方かも知れませんが、ある意味でかなり敷居が下がっていて、質という点で危機的な状況になりつつあるのではないかと思えるのです。

要するに、質の問題を抜きにして考えれば、日本では「紙」にまだこだわっているということと、ゲートが広くなってるということに関して言えば、まだまだ紙メディアは、見る限りは一応盛況というか、にぎわいは残っていくんじゃないかなという気はしています。だから、アメリカほど急激な変化は起きないように思います（もちろん、図書館予算に対する電子ジャーナルの経費の脅威という点では、共通する部分は多いのですが）。

## 日本の出版の現在と未来

――イサカ・レポートについてはこのぐらいにして、次は先生の研究についてお話しいただけますか？　先生は日本の出版業を研究しているということですが、具体的にはどのようなプロジェクトでしょうか？

何でこのプロジェクトを始めたのかというと、少し個人的な話になりますが、実は僕、昔編集者志望だったんです。大学を卒業する年に数社を受けて、結局、全部落とされました。ですから、昔あこがれてた、初恋の相手みたいな業界にいま何が起きてるのかということにすごく興味があって、共同研究者と一緒にいろんなところにインタビューに伺うようになったわけです。

そういうこともあるからこそ、「紙の本」にすごくこだわってるんですけれども、特に興味があるのが、自分自身の仕事に近い学術出版です。これがまた急激に変わっているわけですよね。たとえば、僕が一九八四年に、ある中堅の出版社から出させていただいた最初の本は暴走族についての本です。いわゆる「モノグラフ」だったのですが、当時三〇〇〇部刷りました。いまは、そんなに刷れないですよね。いまだったら一〇〇〇部とか、よくて一五〇〇部くらいでしょうか。二五年前は二倍刷れたのです。それがどんどん変わってきていて、何が起こっているんだろう、と。

いわゆる業界モノといったら業界モノなのですが社会学でいう文化生産論的な視点で、文化というものをつくる現場がどのようにして文化生産物の内容に影響を与えているのか、という点を中心にしています。特に組織と職業の側面に注目しています。つまり、出版社という組織がどのような構造になっていて、どのような人々がどのような仕事をしながら本をつくっているのかということですね。

組織理論や職業社会学の観点から一〇年近く分析してきました。そろそろ何らかのまとめをしなければ、と思っています。いま考えてるのは、いろんなタイプの出版社ないし大学出版部あわせて四社くらいの事例研究を通して、出版の現在を浮かび上がらせるというものです。

リサーチ・クエスチョンは三つ想定しているのですけれど、一つは学術書って何なんだろう、ということ。もう一つは学術出版社って何だろう、と。最後に、出版社においては、どのような形で学術書の刊行に関する意思決定がなされていくのか、ということです。

もう一つ興味があるのは、さっき言ったように日本というのは、違ったタイプの出版社のあいだでどんな棲み分けがなされているか、ということです。アメリカみたいな社会だと、非営利と営利とか、わりと明確に区別できるところもありますが、日本だと欧米のメディア・コングロマリットみたいにがっぽり儲けましょうとか、電子ジャーナルの料金を、とりあえずとれるだけ図書館にチャージしてしまおう、みたいな出版社ってそんなにないですよね。

日本の場合は、専門書出版社というと、結構どこでも一種のこだわりや志があって、いい本を出したい、みたいなところがあるような気がします。それはすごく良いことだと思うのですが、ではそういう出版社のアイデンティティって何なんだろう、と。やわらかいものや教科書的なものも出しながら、同時にかなり高度な研究書も出している。そういう場合に、出版社という組織の中のメンバーは、自分たちの組織は何なのかという点についてどのような認識を持っているか、という点にとても興味があります。それと、その一方で外から見たときのイメージというものも確固としてあるように思います。その組織アイデンティティと組織イメージの関係やギャップみたいなものにすごく興味があります。

――実際に出版社の中に入っての調査で感じたこと、あるいは出版業の今後の方向性について考えていることなどはございますか?

僕の見ている限り、大きな変化があったように思います。特に最近気になるのは、僕たち大学人も同じなのですが、編集者の人たちがかなり時間に追われている、という感じがします。あまり落ち着いて物事を考えられる余裕が無くなってきているのではないか、という印象があります。

アメリカの大学出版部は幾つかありうる中での一つのモデルにすぎませんが、厳密で丁寧な査読プロセスや編集のプロセスなどについては、まだまだ学ぶべきところがあるような気がしています。それに関連することですが、われわれ大学人がアメリカに学ぶべきこととしては、査読とはまた別のレベルで、互いに本になる前の原稿を見た上でアドバイスやコメントを加えるという習慣があげられるでしょうね。

アメリカでは、大学院教育の時点でも、それに似た指導が行われているようです。実際、僕の狭い体験から言うと、アメリカの大学院でよく教材として使われていたのは博士論文を本にしたものなんです。そういう本では、文献レビューをきっちりとしてあるのですごく読みやすいですし、一つのことをまとめて見せてくれる。それがそのまま教材として使え、次世代の研究者の再生産に使える。そういう出版物はアメリカではすごく蓄積されているようですが、日本にはあまりないですよね。

日本でも、そういう、大学人の間で原稿にコメントを与えあう習慣とか大学院教育のあり方を全部ひっくるめた形での、もっと丁寧な本づくりの慣行は根付いていかないことには、できてくる本の深さとか持続性は保証できないのではないでしょうか。

# ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編　A5判／160頁／定価1680円

## 自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ


**I. Prologue of Natural History**

第1話　自然を記録すること……斎藤靖二

第2話　自然史と本……青木淳一

第3話　日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男

コラム①　動物写真の世界

**II. History of Nature**

第4話　ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司

第5話　マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子

第6話　京都の語り部：深泥池……竹門康弘

第7話　遺跡の土に秘められた情報……松井　章

コラム②　ききみみずきん

第8話　遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀

第9話　ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人

第10話　日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

**III. Diversity of Nature**

第11話　サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ

第12話　日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和

第13話　琉球列島の自然史……太田英利

第14話　マンボウと標本……松浦啓一

第15話　分類学事始め：タクソン，タイプ，名前……馬渡駿輔

コラム③　サルにノミはいない？　幻の定説

**IV. Story of Nature**

第16話　クマ大量出没の謎……大井　徹

第17話　ふしぎの国のアリ巣……丸山宗利

第18話　現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫

第19話　子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲

第20話　熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗

第21話　殿様の自然史……松岡明子

第22話　幻のロバと男たち……木村李花子

第23話　食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周　達生

コラム④　アリジゴクの自然史

**V. Epilogue of Natural History**

第24話　遺伝子を通した動物との対話……村山美穂

第25話　ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田　睦

コラム⑤　小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一

自然史文献リスト

# 大学出版部ニュース

## 二〇〇八年度定時社員総会の開催

二〇〇八年度定時社員総会は、五月三〇日に日本出版クラブで開催された。全国に社員を有する協会は、全社員が一同に顔を揃える機会は少なく、夏季研修会、年末例会、この総会ぐらいであるが、本年度は、協会創立四五周年で、節目の年となる総会でもあった。

一方二〇〇五年七月二九日、当会場で「有限責任中間法人大学出版部協会」の設立報告会を新聞社、業界紙、取次店、主要出版団体をお招きして、法人組織としてスタートしたことが、まだ記憶にも新しい。が、来年度は公益法人改革の一環で中間法人法が廃止となる。来年の定時社員総会では「一般社団法人大学出版部協会」名に変更となろうが、四五年の歴史を踏まえつつ、法人としての事業をさらに一歩進める契機としたい。

昨年度の弘前大学出版会に続き、今年度は東京農工大学出版会の入会が承認され、会員数が三二出版部となった。各出版部のより積極的参加をお願いする次第である。

# 北海道大学出版会

▼辻康夫・松浦正孝・宮本太郎編著『**政治学のエッセンシャルズ**』（A5判・二五二〇円）現代政治と政治学の理解に必須のポイントを、問題の背景・議論の経緯・今後の展望など簡潔に提示。どこから読んでも面白い新しい形のテキスト！

▼木村和範著『**ジニ係数の形成**』（A5判・三九九〇円）構想過程を、パレートからベニーニ、ローレンツに至る先行理論とジニの原典に即して詳述。先行理論との関連、定義式の相互関係、平均差の意味など、ジニ係数の理解の深化を試みる。▼俵浩三著『**北海道・緑の環境史**』（A5判・三六七五円）長く北海道自然保護協会会長を務めた著者が、北海道の自然の象徴である「緑の環境」がどのような特徴をもち、いかに開発され、どう守られてきたのかをまとめた、渾身のライフワーク。▼倉田賀世著『**子育て支援の理念と方法**』（A5判・五九八五円）子育て世帯に対する経済的支援策について、拡充するための方策とそれを支える法理を、先駆的取り組みを行っているドイツ法との比較研究から解説。

# 弘前大学出版会

▼『**いまベトナムは―経済の移行と発展への道のり**』秋葉まり子編（A5判・五七頁・定価五二五円）国家が誕生して以来、ベトナムの歴史は独立を目指した過酷な戦いの連続であり、戦いに勝利した後も社会主義国家としての統一という険しい道のりを辿らなければならなかった。本書は、このベトナムの国作りにおいて、一九八六年以降のドイモイ（刷新）の下でどのように持続的な経済成長につなげようとしてきたか、また新たな経済システムへの移行を模索してきたのかを検証する。

▼『Music Education Policy and Implementation: International Perspectives』Chi Cheung LEUNG／Lai Chi Rita／今田匡彦編（B5判・二六一頁・定価二一〇〇円）音楽、芸術、文化に於ける政策とその実行及び展開を、世界的視野から幅広く論述していく。政策・方針の開発、実行のダイナミックな本質について、国際舞台で活躍する学者、研究者、政策立案者、行政官などが、異なる立場で詳細な分析を試みることにより、音楽・芸術教育の未来を探求するものである。

## 東北大学出版会

▼百々幸雄・竹間芳明・関豊・米田穣著『**骨が語る奥州戦国九戸落城**』（A五判、二二五頁、二一〇〇円（税込））数千人が籠城した奥州九戸城は、天正一九年九月二日、豊臣秀次を総大将とする数万人規模の上方軍に包囲され、九月四日には城主九戸政実が投降する。このとき、城に残るものを助命するという約束は反故にされ、開門と同時に上方軍は城になだれ込み、為すすべもなく逃げまどう籠城者を情け容赦なく殺戮した。約四〇〇年後の平成七年、九戸城二ノ丸跡から十数体の惨殺死体が骨となって発見された。これらの人骨こそが戦国の世の酷さを如実に物語っている。

▼河北新報社編集局編著『**東北大学一〇〇年　学び究めて**』（A五判、二五一頁、一八九〇円（税込））二〇〇七年に創立一〇〇周年を迎えた東北大学を、主要な研究、教育、文化、環境、生活など多方面から紹介する。河北新報に掲載されたコラムを編集し、写真も追加。世界に羽ばたく東北大学の雄姿をこの一冊で読み取ることができる。

## 流通経済大学出版会

▼宮脇敏哉著『**現代経営管理と経営戦略モデル**』A五判・三六七五円

現代企業の発展、成長に必要なものは、経営戦略におけるイノベーションである。一般的にイノベーションは変化・変革と呼ばれているが、経営学的には〝技術革新〟である。つまり、現代企業に必要な〝創造的破壊〟をとおして企業はさらに発展する。このことから、特に大企業においては変化し続けることは重要なポイントになる。もちろんベンチャー企業においても同様であり、イノベーションなくして新しい生産方法、新しいチャネル、新しい組織は生まれない。

アドバンテスト、イマジニア、メガチップスその他日本の優良ベンチャー企業の成り立ちや、事業展開、経営の方向性、経営戦略、社会的責任と環境経営等々は多くの参考となる。

本書は、基礎的な経営管理と経営戦略、財務管理が学べることはもちろん、企業の経営管理と実際の先端技術、先端ビジネスモデル型企業をケースとした経営書でもある。具体的に企業経営ノウハウが修得しやすい構成になっている。

## 聖学院大学出版会

▼大木雅夫・中村民雄編著『**多層的ヨーロッパ統合と法**』（A5判、六三〇〇円）

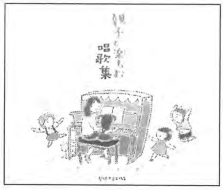
ヨーロッパ統合は、瓦解の力と統合の力の引き合う中で揺れ動いてきたが、その歴史と現在を「法」の観点から捉えなおす。須網隆夫、滝沢正、広渡清吾、大藤紀子ほかEU法の専門家たちの共同研究の成果。

▼平山正実編著『**死別の悲しみに寄り添う**』（臨床死生学研究叢書1、A5判、三五七〇円）

医療技術の発達とともに、延命治療が可能となった。しかし意味のある死をどのように、どこで迎えるかは、だれにとっても判断の難しい重い課題となっている。また、死別の悲しみにどのように向き合うのか、医療従事者、カウンセラーたちが直面するさまざまな課題も生じている。これらの問いに、医師、看護師、カウンセラーたちが、臨床の場で取り組み、研究し、考察を深めてきた。本書は、共同研究として二年間にわたって続けられてきた「臨床死生学研究」の最初の果実である。

## 聖徳大学出版会

▼既刊「心と身体の癒しシリーズ」第一巻『**音楽療法を語る**』―精神医学から見た音楽と心の関係
村井靖児著／四六判／上製本／二八〇頁／定価二一〇〇円
本書では、音楽療法の第一人者である著者が音楽療法の理論、心身と音楽との関係を解き明かす。
第二巻『**医における癒し**』―人間関係の形成のなかから
森彪著／四六判／上製本／二八〇頁／定価二一〇〇円
本書は、医師である著者が実際の医療現場で実践し、その経験を基に人間的な眼差しで書き下ろしたものである。
▼『**親子で楽しむ唱歌集**』（CD　三四〇〇円税込　二枚組　女声アンサブンル）
花、春が来た、春の小川、めだかの学校、雪、村祭、茶摘、こいのぼり、うみ、故郷、赤とんぼ等おなじみの歌全四二曲を収録した。




## 麗澤大学出版会

▼福田恆存著『**平和論にたいする疑問**』―「福田恆存評論集・第三巻」（二九四〇円）。〈第四回配本〉
▼吉國眞一著『**国際金融ノート―BISの窓から**』（二五二〇円）日銀、BIS（国際決済銀行）、IMF（国際通貨基金）の勤務を経験した著者が案内する「冷静と情熱の狭間でゆれる」国際金融の世界。
▼水野治太郎著『**「経国済民」の学―日本のモラルサイエンス研究ノート**』（二九四〇円）麗澤大学の創立者・廣池千九郎の樹立した、日本で最初の総合人間学・モラロジーの独自性と普遍性を探究する。
▼永安幸正著『**経済の哲学―心が変わり物が変わる**』（三三六〇円）地球環境から「人のいのち」までの持続的発展のための、〈経済〉の新しい考え方を提唱。

『国際金融ノート』

## 慶應義塾大学出版会

▼マイケル・トマセロ著／辻幸夫ほか訳『**ことばをつくる―言語習得の認知言語学的アプローチ**』（三六七五円）比較認知科学や発達心理学における豊富な研究データをもとに、"Usage-Based Model（用法基盤モデル）"のアプローチから子どもの言語習得のプロセスを明示する。認知言語学の最新の研究書。
▼久米邦武編著／水澤周訳・注『**現代語訳　特命全権大使　米欧回覧実記　普及版**』（全五巻）（第一巻＝一六八〇円、第二～五巻＝各一八九〇円）明治の古典を現代に甦らせて話題を呼んだ『現代語訳　特命全権大使　米欧回覧実記』（二〇〇五年弊社刊）を普及版として刊行。本文・図表そのままに、携帯にも便利なコンパクトサイズ。
▼井筒俊彦著『The Structure of Oriental Philosophy: Collected Papers of the Eranos Conference』（全二巻）（Vol. I＝五二五〇円、Vol. II＝四七二五円）世界的な言語学者、イスラーム学者であった井筒俊彦がエラノス会議で行った伝説的名講義を収録。井筒ライブラリー・東洋哲学シリーズの第四弾。

## ケンブリッジ大学出版局

▼**War Crimes in Internal Armed Conflicts**（Hardback 9780521860734, USD 130.00）
国際法定番シリーズ Cambridge Studies in International and Comparative Law の新刊。国内武力紛争における戦争犯罪の法について考察する。慣習国際法を基にした旧ユーゴやルワンダ国際刑事裁判所の判決に疑問を呈し、国家慣行や国際組織の慣行を通じて判決の妥当性を分析。普遍的管轄権の適用性に加え、戦争犯罪の追及における国際法廷の役割や実績についても分析する。

▼**Stahl's Essential Psychopharmacology, 3rd Edition**（Paperback 9780521673761, USD 85.00）
世界的ベストセラー、スタール著『精神薬理学エセンシャルズ』の待望の第3版。本書では、全体的に内容が更新されただけでなく、精神科遺伝学、疼痛管理、認知障害、睡眠障害に関する4つの章が追加された。さらに肥満や依存症、電気ショック療法や神経調節に関する新しい情報をも含む。図解も大幅に増え、精神薬理学に関わる幅広い読者層を対象とする。

## 産業能率大学出版部

▼森均・米井恵美著**『〝やる気を起こす〟新大逆転教育』**（一六八〇円）
税理士試験十一年連続全国最年少記録、公認会計士2次試験全国最年少合格記録など、数々の偉業を達成した著者が、高校を飛び越えた進路、「やる気」を起こす教育とは、学校教育のあり方などを鋭く説く。

▼宮川雅明著**『プロジェクト・マネジメント実践』**（一六八〇円）
プロジェクト・マネジメントの目的「プロジェクトの生産性」「人材の育成」「組織としての知的財産」を同時に達成するために、プロジェクト・マネジメントのフレームワークを7原理として整理し、成果につなげるポイントを事例やコラムを豊富に交えて解説。

▼産業能率大学出版部編著**『平成二〇年版徹底解説・1次試験インテリアコーディネーター資格試験問題』**（二七三〇円）**『平成二〇年版徹底解説・2次試験インテリアコーディネーター資格試験問題』**（三三六〇円）
過去問題・解説、傾向と対策、予想問題を掲載。受験生必携書。

## 専修大学出版局

▼麻島昭一編著**『日本信託業証言集 上・下巻』**（A5判・各八四〇〇円）
昭和初期から四十年代までのわが国の信託会社、その後身である信託銀行の経営者と諸業務に携わった人々、また学者、銀行、信託行政当局者など信託業に関連した人々による、日本信託業史研究に寄与する証言集である。これまで研究上あまり問題とされてこなかった地方信託や、植民地信託業の担い手であった朝鮮信託も、ヒアリング作業の過程を通じてその実像に近づくことができ、戦中、戦後の混乱期における信託業の概要と役割を再把握することができる。さらに日本金融史のなかでの信託部門の位置づけと、内包する解決すべき課題を洗い出し、それらが肉声で語られたことに価値が見出せるともいえる。

▼藤本一美著**『現代日本政治論1945―2005』**（A5判・二八八頁・二九四〇円）
占領下、五五年体制、高度成長期、政治改革など、日本の戦後政治史を詳細に論述。保守と革新の対立軸を分析・検討して日本政治の特色を考察する。

## 大正大学出版会

▼倉島節尚著『**日本語辞書学への序章**』（A5判　420頁　予価4950円）辞書は実用的な機能を利用することが中心で、その編纂法や構成などを研究対象とされることはなかった。近代以降編纂された辞書に関しての研究が始まったのは、比較的近年のことで、研究者による論考が発表されるようになった。著者は、これを一つの学問領域としての「日本語辞書学」を成立させようという提案を自ら実践する意味で、これまでに発表してきた辞書に関する論考をまとめた。

序論「日本語辞書学への道程」第一章総論「日本語辞書学の目指すもの」。第二章各論「近代国語辞典の誕生と展開」「国語辞典の編集」「辞書における規範と慣用」等。第三章は、「ブラウン『会話日本語』の日本語」「メドハースト『英和・和英語彙』の日本語」など幕末期に外国人によって編纂された日本語辞書を取り上げて論述する。（九月上旬刊行予定）

▼小嶋知善編『**久保田正文著作選**』（A5判　600頁）短歌雑誌『八雲』の編集にかかわり、その後文芸評論家として活躍した久保田の作品を収録する。（近刊）

## 玉川大学出版部

▼前田紀美子著『**やさしさが伝わる　日本の礼法**』（三九九〇円）

日本人の美徳と思いやりの心をあらわす日本の礼法。伝統的な礼儀作法の歴史から実践、四季折々の行事、折形、贈答の包み・結びまでを、豊富な図版と実例を交えて具体的に解説。美しい日本の礼法のすべてがわかる。

▼松野康子著『**松野康子先生の　算数はこう教える！**』（一八九〇円）

プロ教師が語る、算数授業の極意。実際に20の問題を解きながら、その指導法を具体的に提示。子どものひらめき、つまずきを大切にし、現場で使える簡潔・明瞭・的確なポイントを紹介。「算数ぎらい」をなくし、算数を通して子どもたちに「生きる力」を身につけさせる。

▼太宰久夫編『**子どもと創る演劇**』（三九九〇円）

子どもから大人まで誰もが見て読んで楽しい学校劇の創り方の本。舞台の第一線で活躍するプロが、劇創りの基本を解説。劇を創り上げる経験をすることで、子どもたちは豊かな表現力、コミュニケーション力を培う。

## 中央大学出版部

▼三浦信孝・松本悠子編『**グローバル化と文化の横断**』（四五一五円）比較史・比較文化論の新たな展望を拓く内外の研究者による意欲作。

▼鈴木敏文・林昇一監修／中央大学総合政策研究科経営グループ編『**経営革新 vol.4**』（二五二〇円）大手企業の経営者が語る経営の神髄、経営革新実践の書。

▼クォン・オユル他編『**グローバル時代の韓国新経済戦略**』（四六二〇円）一九九七年の金融危機以後、驚異的な回復を示した韓国経済について経済政策の中枢で活躍する韓国研究者たちが分析する。奥本勝彦・林田博光監訳。

▼菅原彬州編『**連続と非連続の日本政治**』（三八八五円）近現代の日本政治の展開を「連続」と「非連続」という分析視覚を導入、日本の政治的転換の歴史的意味を捉え直す問題提起の書。

▼山内惟介・石川敏行・工藤達朗編訳『**ヨーロッパ・ドイツ行政法の諸問題**』（二六二五円）エーラース教授講演集。ヨーロッパ共同体法がドイツ行政法に与える影響を分析。行政手続法、公共企業体法、ドイツ法曹養成制度について論及。

## 東京大学出版会

▼大泰司紀之・三浦慎悟監修『**日本の哺乳類学　全3巻**』

日本の哺乳類研究の最前線をとらえたシリーズ。ネズミ、シカ、クマ、サル、そしてクジラやアザラシなど、陸域から水域まで、さまざまな環境に適応した動物の興味深い生態を気鋭の研究者が描き出し、さらに野生動物の保全や被害問題について詳述する。

本シリーズは、二〇〇五年に札幌で開催された第9回国際哺乳類学会議（IMC9）を記念して、日本哺乳類学会の支援を受けて刊行されたものである。

森や海に生きる野生動物の躍動感あふれる世界と、それを追い続ける研究者の情熱にぜひふれてほしい。

①**小型哺乳類**　本川雅治編　四六二〇円

②**中大型哺乳類・霊長類**　高槻成紀・山極寿一編　五二五〇円

③**水生哺乳類**　加藤秀弘編　四六二〇円

## 東京電機大学出版局

▼田澤義彦『**大学新入生の数学**』（A5判／二六二五円）本書の目的は高校数学と大学の数学の橋渡しをすることである。したがって、内容は高校の数学レベルを前提として構成した。高校生はもちろん文系の大学生や年配の読者が高校の数学の要点をやり直してみたいと思う際に使いやすい一冊となっている。高校の数学を一冊にコンパクトにまとめ、説明を具体的にし、さらにウェブ上にVOD（ビデオ・オン・デマンド）による本の解説講義を設置している。

▼井出英人他著『**学生のための電気回路**』（B5判／二一〇〇円）電気回路は理工系の大学初年次に直面する難解な科目の一つである。それだけに本書を執筆するに際しては、基本事項を容易に理解し、応用能力を培うことができるよう配慮した。特に図表や用語解説、例題を多く導入し、演習問題を各章末に掲載した。著者らは電気回路の講義・演習を長年担当した経験をもとに、電気回路を教える難しさや学生の理解しにくい点を把握して本書をまとめた。理工系学生の基礎学力養成に最適の一冊である。

## 東京農業大学出版会

▼**ドイツ-グリーン・ツーリズム考―田園ビジネスを創出したダイナミズム―**

鈴江恵子著

グリーン・ツーリズムは農業、農家、農村環境をベースとした観光事業である。今までにグリーン・ツーリズムを農業生産や農家経営、農村地域の多面的価値の活用、さらには広域農環境政策など多段階の総合的システムデザインとしてとらえ、その合理的推進構造を考察しようとした研究は見られない。そこで、実際に有効な地域活性化にはビジネスの視点が不可欠であり、農業に対するビジョン、農業政策や環境政策、財政政策等の枠組み、グリーン・ツーリズムの推進組織、農家経営の実態を調査分析し、グリーン・ツーリズムを田園ビジネスとして位置づけ、新規ビジネスの育成に成功しているドイツにおけるグリーン・ツーリズムの特性ならびに推進構造を明らかにすることを目的とした。

本書は著者の学位論文を基にしたものであるが、テキストとして好書である。

平成二十年五月／A五判

一六七頁／税込価格一三六五円

## 東京農工大学出版会

▼『人が学ぶ　昆虫の知恵』普後一著（B5判・一六八頁・一四七〇円（税込み））

大学のもつ知的資産の社会的還元を目的に発足した東京農工大学出版会が、一般読者を対象に自然界の様々な不思議をイラスト多用でやさしく紹介する「人が学ぶ」シリーズの第1弾。

本書では、昆虫の体の構造や生理機能、様々な昆虫の生態など、身近な昆虫の基本的な事柄を紹介すると同時に、昆虫と人との関わりや昆虫と文化など、同じ地球に住む昆虫を様々な角度から俯瞰している。

「人が学ぶ」シリーズでは、今後「植物の知恵」「イヌの知恵」「微生物の知恵」など、多くの「知恵」を刊行していく。

## 法政大学出版局

▼J・ヴィーコ／上村忠男訳『新しい学』（全三巻、二九四〇円、四四一〇円、三六七五円）人文学の分野に〈コペルニクス的転回〉をもたらしたヴィーコ。その主著の待望の新訳がついに完結。

▼高橋雄造著『博物館の歴史』（七二四五円）ルーヴル、スミソニアン、ドイツ博物館など、主要博物館の沿革と特徴、方法論の形成過程を論じつつ、現代における公共博物館のあり方を問う。

▼R・ポーター／目羅公和訳『身体と政治』（五七七五円）近代初期イギリスにおける「医療の劇場」を図像学的に読み解き、健康と病気が政治や社会に与えた比喩的・象徴的意味を明らかにする。

▼P・バーク／長谷川貴彦訳『文化史とは何か』（二五二〇円）世界的な規模で展開する文化史研究を網羅しながら、その過去・現在・未来を明晰に論じ、今後の研究の新たな地平を切りひらく。

▼F・ジェローム他著／豊田彰訳『アインシュタインとロブソン』（三六七五円）黒人のオペラ歌手ロブソンとの交流を通して、人種差別と闘い続けた偉大な物理学者の知られざる側面に光を当てる。

## 武蔵野大学出版会

▼小林矩子著『ハリー・ポッターとその時代』（A5判・二四〇頁・二六二五円）

著者は武蔵野大学名誉教授。南カリフォルニア大学大学院（図書館学修士）、カリフォルニア工科大学図書館勤務の経歴を生かして武蔵野女子大学（現・武蔵野大学）で司書課程を担当、司書・司書教諭の育成に携わった。本書は、子どもの読書離れが憂慮される中で突如世界を席巻した「ハリー・ポッター旋風」、ハリーとともに押し寄せた「境界領域文学」（「児童文学」「おとなの文学」の境界領域にある、おとなも子どもも楽しめる文学）流行の大波、波にのったハッドン、プルマン、マーテルらの作家たちの活躍と出版界やメディアの動向などを論じながら、子どもたちに良質の読書材を提供するおとな――親、教師、図書館員、出版社、翻訳者――の役割と子どもの読書について考察する。

## 武蔵野美術大学出版局

▼『建築』板垣鷹穂（菊判、四四八頁、四二〇〇円、近刊予定）
昭和一二年から一七年にかけて岩波書店発行の『思想』に連載されたエッセイが、一七年に『建築』として育生社弘道閣から刊行された。生前、板垣自身がもっとも愛した『建築』には、四四編がおさめられている。階段、柱、窓と壁、屋根、天井…記念地域、工場地帯、観光地区…古都、新都、廃都…建築史家、建築史学、建築史観。幼い日のヨーロッパへの憧憬、イタリア遊学の日々、ブルネレスキやブルクハルトへの敬愛。過去を回想する一方で、当時最新の日本建築に鋭い批評を展開するかと思えば、建築史を教育者の立場から喝破する。
本書は、原著にはなかった建築図版や、註、高橋榮一による解題を付し、新字新かなにあらためての復刊である。
一九二九年一〇月、板垣は武蔵野美術大学の前身である帝国美術学校開校記念式典において、特別講演「イタリアルネサンス」を行った。二〇〇九年、本学は創立八〇周年を迎える。本書はその記念出版のひとつである。

## 明星大学出版部

▼**経済指標解読法―経済を見る眼を養う**
吉川紀夫著
複雑な経済社会を生きていくためには経済指標を正確に読む力が求められる。指標に日頃から慣れ親しむこと、定義を把握しておくこと、意味を考えながらその限界を承知して使うこと。経済の実情を見る上で当面必要となる事項について、図表を示しながら分かりやすく説いた経済学入門。
新書判・二三〇頁　九四五円

▼**現代公教育との対話―「教育国家」の創造と「スクール・ガバナンス」の確立**
樋口修資著
質の高い教育を提供し、基礎・基本を身に付け、心豊かでたくましい子どもの形成を実現するために、公教育の制度設計と内容構築を提言する教育講演集。
A5判・三八〇頁　三一五〇円

▼**生活経済学の考え方―実感のある経済学への模索**　吉川紀夫著
A5判・二六二頁　二六二五円

▼**子どもの発達と環境―児童心理学序説**
塚田紘一著
A5判・二七八頁　二四一五円

## 早稲田大学出版部

▼『国際マクロ経済学の新展開』（秋葉弘哉著　五〇四〇円）国際マクロ経済学には、「パズル」と呼ばれる未解決問題がある。本書は為替レート動学、通貨危機、金融統合など国際金融論で世界的注目を浴びるテーマを取り上げて、実証分析を交えた斬新な結論を提示している。第1章「為替レート動学の現状」以下、「期待、安定性、およびポストケインズ学派の仮説下の為替レート動学」「アジア通貨危機に対する伝統的な二つのモデルの実証的評価」「バランス・シート効果と通貨危機」「開放度と産出量－インフレのトレードオフ」「金融的地域統合の展望」「通貨同盟、実施為替レート、および厚生」の7章で構成されている。

▼『**現代日本の東南アジア政策 1950-2005 〈アジア太平洋研究選書⑦〉**』（波多野澄雄、佐藤晋著　四〇九五円）
日本にとってもっとも重要な地域の一つがASEAN十カ国であろう。本書は半世紀を超える日本の東南アジア外交の軌跡や政策構想の消長を振り返り、対外政策にとっての東南アジアの意味を考えるための一助となるだろう。

## 東海大学出版会

▼W・G・ホスキンズ著／柴田忠作訳『**景観の歴史学**』（五〇四〇円）
イングランドの景観形成史の痕跡が残る遺跡や建造物などを紹介し、「人間と歴史が作り、そして破壊し、再生した」イングランドの景観の歴史を描く。ナショナル・トラスト運動のきっかけとなった書であり、時代を超えた景観史の名著。
▼花元潔・米田周編著『**アウシュビッツの沈黙**』（二六二五円）
一九九七年のポーランドにおけるインタビュー取材を元に、強制収容所とゲットーに囚われた二三人の証言記録を編集再現する。一九三九年のポーランド侵攻に始まる狂乱の歴史を一〇歳前後で体験した二三名の半世紀を越えた記憶の歴史は今もって重い。
▼東海大学教養学部国際学科編『**第3版 国際学のすすめ**』（二二〇五円）
テロ、イラク戦争、PKO、北朝鮮、イスラム、中国製品の安全性、エイズ、世界遺産、国際平和、安全保障、軍事、環境問題……、歴史・民族・宗教・文化・政治・経済など複雑に絡み合う世界情勢をやさしく読み解く。

## 名古屋大学出版会

▼林　洋子著『**藤田嗣治　作品をひらく―旅・手仕事・日本―**』（五四六〇円）
多文化・多分野を越境する創造者・藤田嗣治。評伝を超え、多数の図版掲載を実現して作品から画家に迫った意欲作。
▼西澤泰彦著『**日本植民地建築論**』（六九三〇円）建築が植民地支配に果たした役割を余す所なく描くとともに、日本近代建築史の巨大な欠落を埋め、初めて本格的な歴史的評価を示した注目の研究。
▼遠藤　乾編『**ヨーロッパ統合史**』（三三六〇円）政治・経済から軍事・安全保障、規範・社会イメージにわたる複合的な国際体制の成立と変容を描き出し、ヨーロッパ統合の新たな全体像を提示。
▼田所昌幸著『**国際政治経済学**』（二九四〇円）国際政治と国際経済にまたがる広大な領域に挑み、多角的な記述とポイントをおさえた資料によって、複雑なリアリティを捉えていく傑作テキスト。
▼渡邊誠一郎／檜山哲哉／安成哲三編『**新しい地球学―太陽‐地球‐生命圏相互作用系の変動学―**』（五〇四〇円）シームレスなシステムの過去と現在を観測・モデルの両面から把握。

## 三重大学出版会

▼マイク・グレイカス編、塚本晃久訳『**パプア・ニューギニア小説集**』四六判二三五頁（本体九四〇円＋税）。パプア・ニューギニアの青年作家の作品三編を収録する。
夜明けの炎…ベンジャミン・ウンバ作
家出……オーガスト・キトゥアイ作
タリ……ジム・バイタル作
▼大原興太郎著『**農・教育・人生―コーおじさんの七転八倒半生記**』A5判一六五頁（本体一二六〇円＋税）。
1、農と農学の周辺／2、アジアとのかかわり／3、教育をめぐって／4、地方からのスローライフ／5、生物としての人間と人生／6、おわりに。
▼濱森太郎著『**松尾芭蕉作『野ざらし紀行』の成立**』A5判四五〇頁（本体二四〇〇円＋税）。1、『野ざらし紀行』表現論／2、『野ざらし紀行』推敲論／3、『野ざらし紀行』系統論／4、誤解された『野ざらし紀行』。発端は『野ざらし紀行画巻』の料紙の切り接ぎの分析から始まり、その切り接ぎが引き起す本文の推敲、その推敲が切り開く新しい表現領域。松尾芭蕉の文芸的な努力の痕跡を辿る。

## 京都大学学術出版会

▼『**農耕起源の人類史**』ピーター・ベルウッド著／佐藤洋一郎・長田俊樹監訳（A5判・五四六〇円）農耕はいかにして世界中へと広まったのか？　この人類史的問いに、考古学、人類学、比較言語学、遺伝学の成果を博捜し、過去一万年にわたる人類の移動と農耕の伝播、文化の衝突と受容のプロセスを大胆に推理。▼『**ムガル都市―イスラーム都市の空間変容**』布野修司・山根周著（菊判・五二五〇円）生活の細部まで定めながらも土着的伝統に寛容な、しなやかな世界宗教――通俗的な理解とは異なるイスラームの奥深さが産んだ街。「微細なものが凝縮した独特の美しさ」をインドの三都の臨地調査から生き生きと描く。▼西洋古典叢書　リウィウス『**ローマ建国以来の歴史3―イタリア半島の征服（1）**』毛利晶訳（四六判変型・三二五五円）ローマ世界最大の歴史家リウィウスは、アウグストゥス帝時代までの数百年のローマ史を、『ローマ建国以来の歴史』一四二巻で描いた。本書は、ローマが周辺諸国を征服し覇権を築き上げるまでを記述する。（全14冊）

## 大阪経済法科大学出版部

今回は既刊書の紹介をします。▼アジア研究所研究叢書9『**日清戦争と東アジアの政治**』戴逸、楊東梁他著／華立監訳／岩田誠一他訳（五〇四〇円）▼日清戦争一〇〇周年を期して、『甲午戦争与東亜政治』（中国社会科学出版社）が刊行され、その翻訳書。▼中国が西洋文明を取り入れるために実行した洋務運動、日本の台湾占領時の住民の抵抗、朝鮮半島を巡る日本の策謀と清朝政府の対抗など日本であまり書かれていない中国、日本、朝鮮三国間の近代の歴史がきわめて要領よくまとめられ、周到な分析と冷静な判断による客観的な叙述は、中国側の歴史観を知る格好の書。▼戦争時の外務大臣陸奥宗光の手記「蹇々録」は一九六三年には中国で翻訳されており、本書でも多く引用があり、日本人の書いた資料から参照されている。▼「これからの日中関係では、善悪とか好き嫌いとかの分別的次元を越えて、如何にして友好を築くかの知恵を磨くために、政府、民間を問わず互いに相手の歴史的立場を頭に入れた交際感覚を養うことが大切であろう。」（訳者後書より）

## 大阪大学出版会

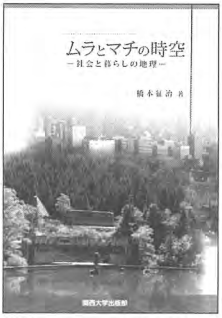
▼神山孝夫著『**脱・日本語なまり　英語（＋α）実践音声学**』（A5判・二一〇〇円）。日本語と外国語の発音を音声学の観点から詳説する。実践的な発音練習の方法を紹介し、どんな言語も正しく発音できるように導く。▼高阪章編『**国際公共政策学入門**』（A5判・二二六二五円）。グローバルな公共的価値の形成と実現を研究する国際公共政策学における最先端の政策課題テーマを通じて、アプローチのための視点と発想を身につける。スタートアップに最適な一冊。▼C＝サッルスティウス＝クリスプス著　合阪學・鷲田睦朗翻訳・註解『**カティリーナの陰謀**』（A5判・二二五二〇円）。ローマ共和制において起きたカティリーナのクーデター未遂事件についてサッルスティウスが著した古典的名著を、詳細な解説と訳注を付して全訳。▼鳴海邦碩・小浦久子著『**失われた風景を求めて　災害と復興、そして景観**』（四六判・一八九〇円）ジャワ島中部地震の復興協力や生活文化と風景に関する考察をもとに、都市環境デザイン専門家の目に映ったまちの記憶と復興の姿を追う。

## 関西大学出版部

▼伊藤健市著『**インターナショナル・ハーヴェスター社　従業員代表制の研究**』（A5判・五八八〇円）一九二〇・三〇年代の従業員代表制の展開を多層的に究明。個別企業の従業員代表制のものとしては、本邦初の研究書。

▼宇佐美幸彦著『**ベルリン文学地図**』（B5判・四二〇〇円）ベルリンで活動した文学者一二二名の生活の場所と作品の舞台を詳しく地図上で再現。文学者たちの行きつけの店なども示している。

▼橋本征治著『**ムラとマチの時空―社会と暮らしの地理**』（B5判・六三〇〇円）近世から近代・高度成長期へと、国内各地ムラとマチの社会と暮らしの時空をめぐる諸相を、社会地理学と複雑性の視点から論じる。



『ムラとマチの時空』

## 関西学院大学出版会

新刊

▼大江　瑞絵・高畑　由起夫編『**学生たちは国境を越える―国連学生ボランティアプログラム／国連情報技術サービス（UNITeS）の挑戦**』（A五並製・一三四頁・定価八四〇円）

▼田中　敏弘著『**経済学史研究と私**』（四六並製・一七八頁・定価一八九〇円）

▼Yasuko Shimizu 著『**Linking Refugee Aid with Development:Development for Refugees,or Refugees for Development?**』（A五並製・二九六頁・定価三九九〇円）

▼天野　明弘編著『**持続可能社会と市場経済システム**』（A五並製・二八〇頁・定価二九四〇円）

## 九州大学出版会

▼河村誠治著『**新版　観光経済学の原理と応用**』（A5判・三三六〇円）。応用経済学としての観光経済学の原理を示すとともに、わが国地域経済の拡大再生産に不可欠な観光経済のあるべき姿を探る。

▼志賀美英編著『**開発教育序論―世界はそして日本はなぜ開発援助を行うか―**』（A5判・三三六〇円）。世界に「発展途上国」と呼ばれる国が存在する理由――国際協力の第一線からの報告。

▼古賀弥生著『**芸術文化がまちをつくる―地域文化政策の担い手たち―**』（A5判・二五二〇円）。アートNPOと行政、企業の協働事例から芸術文化によるまちづくりを模索する。

▼高橋隆雄・八幡英幸編『**熊本大学生命倫理論集2　自己決定論のゆくえ―哲学・法学・医学の現場から―**』（A5判・三九九〇円）。生命倫理のキー概念である自己決定概念の徹底論究14編。

▼高橋隆雄著『**生命・環境・ケア―日本的生命倫理の可能性―**』（A5判・三九九〇円）。ケア概念の新しい解釈を機軸に、生命と環境を巡る倫理的諸問題を統一的に捉え、その構造と連関を読み解く。

# 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

【50 音順】2008 年 8 月 1 日現在

| | | |
|---|---|---|
| 株式会社朝日新聞社 | 〒104-8011 | 東京都中央区築地 5-3-2 |
| 亜細亜印刷株式会社 | 〒380-0804 | 長野県長野市大字三輪新屋 1154 |
| 株式会社アベル社 | 〒162-0825 | 東京都新宿区神楽坂 2-19 銀鈴会館 408 |
| 尼崎印刷株式会社 | 〒661-0975 | 兵庫県尼崎市下坂部 3-9-20 |
| 王子製紙株式会社 | 〒104-0061 | 東京都中央区銀座 4-7-5 |
| 株式会社大森印刷 | 〒105-0003 | 東京都港区西新橋 3-17-1 |
| 岡本出版発送株式会社 | 〒353-0001 | 埼玉県志木市上宗岡 3-16-2 |
| 株式会社協栄アドインフォ | 〒101-0054 | 東京都千代田区神田錦町 1-14 立花日英ビル 2F |
| 株式会社クイックス東京 | 〒102-0073 | 東京都千代田区九段北 4-1-13 ニュー原鉄ビル 5F |
| 港北出版印刷株式会社 | 〒150-0002 | 東京都渋谷区渋谷 2-7-7 |
| 三美印刷株式会社 | 〒116-0013 | 東京都荒川区西日暮里 5-9-8 |
| 三立工芸株式会社 | 〒101-0051 | 東京都千代田区神田神保町 3-4 |
| 三和印刷株式会社 | 〒381-2226 | 長野県長野市川中島町今井字薬師堂 1822-1 |
| 信濃印刷株式会社 | 〒102-0072 | 東京都千代田区飯田橋 4-1-11 |
| 城島印刷株式会社 | 〒810-0012 | 福岡県福岡市中央区白金 2-9-6 |
| 新日本印刷株式会社 | 〒162-0801 | 東京都新宿区山吹町 342 |
| 株式会社鈴木製本所 | 〒112-0014 | 東京都文京区関口 1-17-5 |
| 大同印刷株式会社 | 〒849-0902 | 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉 1848-20 |
| ダイニック株式会社 | 〒105-0012 | 東京都港区芝大門 1-3-4 ダイニックビル 7F |
| 株式会社太洋社 | 〒501-0431 | 岐阜県本巣郡北方町北方 148-1 |
| 株式会社竹尾 | 〒101-0054 | 東京都千代田区神田錦町 3-12-6 |
| 土山印刷株式会社 | 〒601-8305 | 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町 7 |
| 宗教法人天然寺 | 〒204-0021 | 東京都清瀬市元町 1-4-5-711 |
| 株式会社東京弘報社 | 〒101-0051 | 東京都千代田区神田神保町 1-34 |
| 株式会社とうこう・あい | 〒104-0061 | 東京都中央区銀座 8-11-11 |
| 株式会社日本経済新聞社 | 〒100-8066 | 東京都千代田区大手町 1-9-5 |
| 株式会社博報堂 | 〒108-0023 | 東京都港区芝浦 3-4-1 グランパークビル 17F |
| 株式会社平文社 | 〒170-0005 | 東京都豊島区大塚 2-35-7 |
| 株式会社堀内印刷所 | 〒112-0013 | 東京都文京区音羽 1-21-11 |
| 株式会社毎日新聞社 | 〒100-8051 | 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 |
| 株式会社遊文舎 | 〒532-0012 | 大阪府大阪市淀川区木川東 4-17-31 |
| 株式会社読売新聞東京本社 | 〒100-8055 | 東京都千代田区大手町 1-7-1 |

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

# 有限責任中間法人大学出版部協会　加盟出版部一覧

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001　FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320　FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局
〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068　FAX 03-3219-7182

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400　FAX 03-3211-1400

専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学5号館6階
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026　FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

東京大学出版会
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814　FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562　FAX 03-5477-2643

東京農工大学出版会
〒183-8509 府中市幸町3-5-8　東京農工大学内
TEL 0423-67-6700　FAX 0423-67-6700

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
〒169-0071 新宿区戸塚町1-104-25
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921　FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211　FAX 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121　FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233　FAX 0798-53-9592

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515　FAX 092-641-0172

大学出版七五号(二〇〇八年夏)二〇〇八年八月一日発行　頒価一〇〇円(〒共)　発行所＝有限責任中間法人大学出版部協会　ISSN 0913-3305　振替〇〇一七〇-八-三八九一三
〒一一三-〇〇三四　東京都文京区湯島一丁目一四番一号　電話〇三(三八三四)六六八六　E-MAIL:mail@ajup-net.com　URL：http://www.ajup-net.com/